



多田富雄の

# 落葉集

題字・古谷蒼碩

降誕祭の月、今年取って置きの心温まる話をしよう。

石川晶という名前を覚えて  
いるであろうか。日本における  
ビー・バップジャズの草分け  
で、類まれなジャズドラマー  
として活躍した。彼は無類の子  
供好きで、NHKの「ワンツー  
・どん」という番組で、リズム  
の楽しさを子供たちに教えた。  
ひげのおじさんとして思出す  
方も多いと思う。

東京・恵比寿に、「ジャズのラ  
イフハウス「ヒガビガ」を開き、  
来日したジャズマンたちが生の  
演奏を披露した。私も、彼のト  
ーキングドラムに酔いしれた一  
人だった。自己宣伝が好きでは  
なかったため、彼の名はあまり

知られていない。  
彼は1990年に、突然ドラ  
ムの故郷アフリカのケニアに一  
家で永住してしまう。首都ナイ  
ロビに住み、アフリカンドラム  
を探究する傍ら、貧困にあえぐ  
スラムのストリートチルドレン  
を救う活動を始めた。私がそれ  
を知ったのは、彼の兄で私の親

友石川嘸熊本大学名誉教授か  
らの便りであった。

ナイロビ最大のスラムはキベ  
ラという地区にある。そこには  
二万人を超す家にも帰れず、学  
校にも行けないストリートチル  
ドレンがいる。食う物がなか  
ら盗みやゴミ漁りに一日を費や  
し、シンナーで空腹や悲惨な現

実を粉らわしている。シンナー  
を買うためにまた非行に走る。

この悪循環だ。貧富の差は想像  
を絶し、ナイロビの市街の10  
0歩も続くゴミの山には、こん  
な子供たちが群がっている。  
石川晶さんは、キベラの子達  
を更生させるための運動を開始  
した。それが「フューチャーキ

## ケニアからの歌声

「ツズ・プロジェクト」である。  
そうはいってもお金があるわけ  
ではない。あるのは自分がのめ  
りこんでいるアフリカリズム  
だけだ。少しばかりの食べ物と、  
ドラムなどの楽器、親しくして  
いる現地のミュージシャンに参  
加してもらい、子供たちととも  
に歌い、かれらを勇気付けた。

はじめは食物目当ての子供たち  
も、いつしか音楽の力で集まっ  
てきた。ケニアの有名な音楽家  
のカソングさんもボランティア  
で加わったところから、ナイロ  
ビではその存在が知られるよう  
になり、何枚かCDも出した。

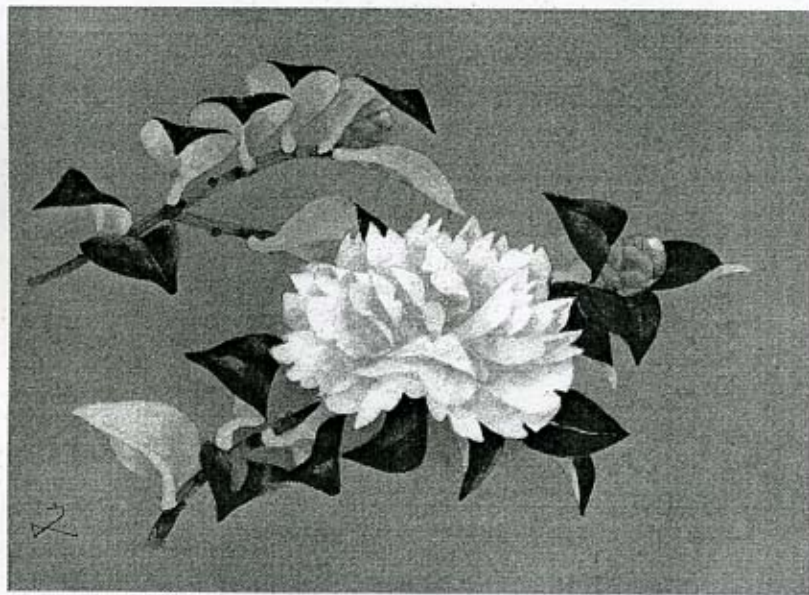
をひきつけたばかりでなく、立  
ち直る勇気を与えた。音楽教室  
ではケニアの公用語である英語  
も教えるようになった。子供た  
ちは、コンサートで歌うために  
シンナー遊びをやめ、将来は音  
楽家になるという希望を持つも  
のもいた。それは彼らが初めて  
持った、すばらしい夢であった。  
晶さんの遺志は徐々に実を結  
び音楽教室には1000人を超え  
る子供が参加している。徐々に  
学校も充実し、シンナーを吸う  
子は少なくなった。子供たちの  
顔は目立って明るくなった。

石川さんたちの合言葉は、ス  
ワヒリ語で「ボレボレ(ゆっくり  
いこう)」であった。思の長い活  
動でなければ、到底この子供  
たちを救うことはできない。

今年の12月、私はキベラの子  
供たちの歌うクリスマスソング  
のCDを贈られた。「シングル  
ベル」や「もろびとこそりて」  
などの聖歌がボンゴやギターを  
バックに、アフリカ独特の高揚  
したリズムで歌われている。十  
歳にもみえない子供たちが、白  
い歯を見せて懸命に歌っている  
のが目に浮かんで、私は深い幸  
福感に満たされる。

今年もその季節になった。私  
にCDを贈ってくれた石川教授  
は、残念なことにこの夏に癌で  
亡くなった。でもキベラでは石  
川晶さんの遺児たちが、「ボレ  
ボレ」の精神で活動を続けてい  
る。www.futurehope.orgで彼らの  
活動が見られる。支援するあな  
たの心も温かくなるだろう。

(ただ・とみお 免校学者)



画・堀 文子